

ミナミマグロ

Southern bluefin tuna *Thunnus maccoyii*



管理・関係機関

みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT)
大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)
インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)
中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)

生物学的特性

- 最大体長・体重：尾又長 2.0 m・150 kg
- 寿命：25 歳以上、耳石での最高齢は 45 歳
- 性成熟年齢：8 歳で 5%、12 歳で 50%、16 歳で 95% が性成熟に達するとして資源評価。
- 産卵期・産卵場：9～翌年 4 月、インド洋東部低緯度域
- 索餌期・索餌場：西風皮流域（南緯 35～45 度の海域）
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：マグロ・カジキ類、サメ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身、寿司

漁業の特徴

1950 年代初期に日本船による漁獲が始まり、現在の主な漁法ははえ縄とまき網である。はえ縄漁業は 3 歳以上の小～大型魚を漁獲している。まき網漁は畜養用種苗を得るためにオーストラリアのみが、2～4 歳を中心とした小型魚を漁獲している。主な漁場は、はえ縄では南アフリカ沖、インド洋南東海域、インドネシア南沖海域（ミナミマグロの産卵場と重複）、タスマニア島周辺海域及びニュージーランド周辺海域、まき網ではオーストラリア大湾である。公海域では主に日本、台湾、韓国が漁獲し、沿岸域ではオーストラリア、ニュージーランド、インドネシア、南アフリカが漁獲している。

漁獲の動向

オーストラリアの竿釣り漁業やまき網漁業による漁獲量は、1982 年に 21,500 トンに達し、その後は自主規制及び缶詰産業の衰退により減少した。1990 年代中頃から畜養用種苗を得るためのまき網による漁獲が再び増加し、近年は主にまき網によって年間約 5,000～6,000 トンが漁獲されている。日本のはえ縄漁業の漁獲量は、1961 年に約 78,000 トンに達したが、産卵場と小型魚が多獲される海域での日本船の操業自粛、総漁獲可能量 (TAC) 規制等で徐々に減少した。その後、1989～2005 年ののはえ縄漁業全体の漁獲量は 8,000～14,000 トンの間で維持されたが、2007 年漁期以降の TAC 削減により減少し、2011 年までは約 5,000～7,000 トンで推移した。2012 年からは TAC の増加に伴い、徐々に増加中である。まき網漁業、はえ縄漁業を合わせた 2022 年の報告総漁獲量は 17,134 トンであった。

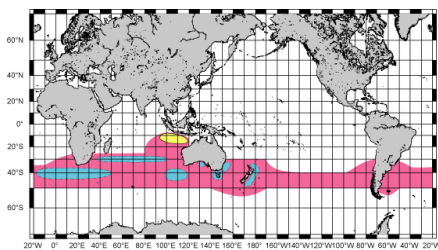
資源状態

資源状態は、CCSBT が独自に開発した統合型資源評価モデルによって評価している。このモデルでは、漁法別漁獲量、はえ縄漁業の単位努力量当たりの漁獲量 (CPUE)、年齢組成データ、航空目視調査による加入量指数、近縁遺伝子標識再捕による遺伝データ、遺伝子標識調査によるデータ等、複数の情報を解析に用いている。

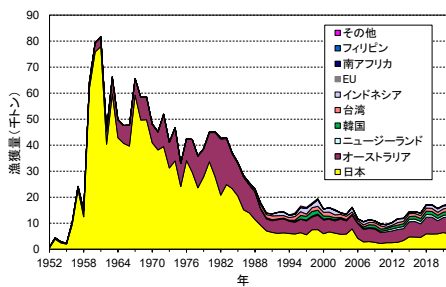
2023 年の資源評価では 2022 年の総再生産出力に基づく親魚資源量は初期資源量の約 23% と推定されている。以前の定義であった 10 歳以上の資源量としての親魚資源量は、本格的な漁業が開始した 1950 年代にはおよそ 100 万トンであったが、1960 年代以降漸減し、1990 年代後半には約 12 万トンまで減少した。その後は同様の資源水準で推移したが、2010 年代からは漸増し、2022 年の親魚資源量は約 266,000 トンと推定されている。これは最大持続生産量 (MSY) を産出する資源量 (B_{MSY}) の約 85% の水準である。現在の漁獲死亡率は MSY を与える漁獲死亡率 (F_{MSY}) の約 50% の水準である。親魚資源量には当初の予測よりも早い回復の傾向が見られており、従前の暫定管理目標はほぼ達成している。管理目標に向けては順調に回復していると思われる。

管理方策	
CCSBT では、例外的な事態が生じない限り、原則として3年ごとに実施される管理方式（事前に定められた方式により、漁獲データ等の資源指標から TAC を自動的に計算する漁獲制御ルール）の計算をもとに TAC が決定される。管理方式による算定結果に基づき、2024~2026 年漁期の TAC は毎年 20,647 トンとすることが第 30 回年次会合（2023 年 10 月）において合意された。メンバーへの割当量は、それぞれ日本 7,247 トン、オーストラリア 7,295 トン、ニュージーランド 1,288 トン、韓国及び台湾 1,468 トン、インドネシア 1,336 トン、EU13 トン、南アフリカ 527 トンである（日本の割当量からはインドネシアに 21 トン/年、南アフリカに 27 トン/年が移譲されている）。	

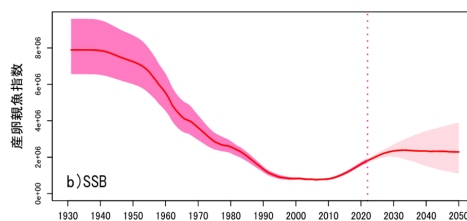
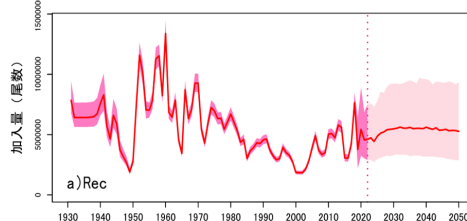
ミナミマグロの資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 (最近5年間)	15,666~17,148 トン 最近 (2022) 年: 17,134 トン 平均: 16,777 トン (2018~2022 年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	5,851~6,452 トン 最近 (2022) 年: 5,887 トン 平均: 6,013 トン (2018~2022 年)
資源評価の方法	漁法別漁獲量、はえ縄 CPUE、年齢・体長組成データ、航空目視調査による加入量指数、CKMR による遺伝データ、GT による標識再捕データ等、複数の情報を CCSBT が独自に開発した統合型資源評価モデルによって評価
資源の状態 (資源評価結果)	初期 SSB の 23% MSY を産出する SSB の 85% MSY を与える漁獲量の 46% 10 歳以上の資源量は 247,963~283,275 トン 2022 年時点、従前の暫定管理目標はほぼ達成、管理目標に向けて順調に回復
管理目標	初期 SSB の 30% 水準（ほぼ B_{MSY} 水準と同じ）を 2035 年までに 50% の確率で達成する。ただし、従前の暫定目標である 2035 年までに 20% 水準を 70% の確率で達成することも必要。
管理措置	TAC の設定: 2024~2026 年漁期の TAC は毎年 20,647 トン（日本 7,247 トン） 漁獲証明制度
管理機関・関係機関	CCSBT、ICCAT、IOTC、WCPFC
最新の資源評価年	2023 年
次回の資源評価年	2026 年



ミナミマグロの分布（赤）、漁場（青）、産卵場（黄）

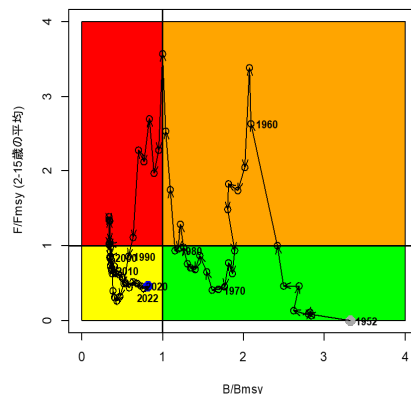


ミナミマグロの国・地域別漁獲量の推移(1952~2022年)



2023 年に資源評価モデルにより推定されたミナミマグロの加入量 (Rec: 上段) 及び親魚資源量 (SSB: 下段) (1930 年~2050 年)

SSB は産卵ポテンシャルに基づく「総再生産出力 (Total Reproductive Output: TRO)」による親魚資源量を表す。太線は中央値、影部は 90% 確率区間点を示す。縦の点線は 2022 年 (資源の現状) を指す。2023 年からの将来部分は管理方式を用いて TAC 設定を続けた場合の予測である。



ミナミマグロ資源の神戸プロット: MSY を産出する資源量に対する各年の資源量の比 (B / B_{msy} : 横軸) 及び MSY 水準を与える漁獲死亡率に対する各年の漁獲死亡率の比 (F / F_{msy} : 縦軸) の推移 (1952~2022 年)

丸印は推定されたそれぞれの比の中央値を示し、矢印はそれらの推移を示す。灰色の丸印は 1952 年時点、青色の丸印は 2022 年時点 (資源の現状)。